【資　　料】

高校生の進路に関する文献レビュー
―看護職における人材確保の視点から―

種本純一　山口佳子

【要　　旨】

看護職の人材確保の視点から、高校生の進路に関する研究を包括的に整理し、今後の課題や研究の方向性についての示唆を得ることを目的に文献レビューを行った。CiNii Articles、医学中央雑誌 web 版を用いて、2002年３月～2020年３月までに発表された国内の文献４件を対象とした。マトリックス法により分析した結果、看護職について具体的にイメージできるだけの知識や情報を提供することに加え、社会的ニーズや国家資格をもつ意義、看護の魅力についてもより広く周知される必要性が示唆されていた。

看護職における高校生の進路および職業選択に関する研究は少なく、その対象も一部の高校生や看護職を志望する女子に限られていた。今後は全高校生を対象とした調査を実施し、看護職を志望する背景にはどのような要因があるか、志望者の数が圧倒的に少ない男子高校生は看護職をどのように認識しているかといった実態を明らかにしていく必要性が示唆された。

【キーワード】高校生　看護　進路　職業選択

Ⅰ．序論

団塊の世代（約800万人）が75歳以上となる2025年、日本は世界に例のない超高齢多死社会を迎えることとなる。平成26年には医療介護総合確保推進法が成立され、効率的かつ質の高い医療提供体制の構築と地域包括ケアシステムの構築が求められるようになった。その実現のためには人口及び疾病構造の変化に応じた適切な医療提供体制の整備が必要不可欠とされ、看護職員の就業場所も医療機関に限らず在宅や施設等、さらに拡大し続けている。このような社会的背景において、看護師として必要な能力を備えた人材の需要が益々高まるなか、我が国ではいまだその数が十分確保できているとは言い難い。厚生労働省（2019a）は、看護職員のワークライフバランスの充実を前提に、労働環境の変化に対応して幅をもたせた３通りのシナリオを設けて看護職の需要を推計した。その結果、2025年における看護師の必要数に対して、最大27万人の看護師が不足することが明らかとなった。また2019年の時点において看護職員の求人倍率1.0を下回る都道府県は一つもなく、足下の看護職員不足の対応は目下、地域を問わない課題であるとされている（pp. 3-4）。しかしながら、日本看護協会が行った病院実態調査では、直近５年間の離職率は約11％で推移しており（2020a, p. 16）、その大きな要因の一つと考えられるのが、ライフスタイルの変化である。

2018年時点の就業看護師およそ122万人のうち、女性92.2％、男性7.8％と９割以上が女性である（厚生労働省，2018）ことから、結婚、妊娠・出産、育児により転職あるいは退職を考える者が我が国では少なくない。現に、看護職員確保対策に向けた看護職及び医療機関等の実態調査（武村，佐々木，米倉，國江，市川，木田，2018, p. 7）によると、最初に就業した施設または転職先の施設を退職した理由として結婚、妊娠・出産、育児を上げた者は４割近くにのぼる。2010年に行われていた厚生労働省による調査においても、退職理由として最も多かったのが「出産・育児のため」、次に「結婚のため」であったことから（厚生労働省，2010）、看護職を取り巻く状

日本赤十字北海道看護大学
（2020. 9. 30受理）

況はあまり変化していないことが読み取れる。近年我が国では、育児休暇の積極的利用が社会全体で推し進められているが、いまだ「育児休業は女性がとるもの」という認識が根強い。そのことを示すように、男性の育児休業取得率は平成29年度時点でわずか5.1％に留まっている（厚生労働省，2019b, p.4）。臨床で勤務する看護師からも、このような理由から人手不足に悩まされ、激務となっているとの声が多く聞かれてきた。性別ごとの育児休暇の取得率と看護職の割合、退職理由の実態を見る限り、ライフステージの変化が看護師不足の大きな要因となっていることは想像に難くない。看護士、看護婦の名称が現在の看護師へと統合されたのは2002年３月のことであり、すでに20年近くが経過しようとしている。1994年に制定された「看護師等の人材確保の促進に関する法律」により看護学部をもつ大学は2018年の時点で265校にまで急増し、2008年には38,000名だった男性看護師も2016年には84,000名と、８年間で２倍以上に増加した。それでも看護学校全体からすると、2019年度の入学者６万5427人のうち、男子学生の割合は10.3％（例年11～12％）に留まっており（厚生労働省，2019c）、看護職を目指す男性の割合が増加していく気配は一向にみられない。いまだ多くの文献において看護師という職業に「男性」という名称を用いられているのが一般的である。前述した我が国の社会情勢から見ても、男女の割合に差がなくなっていくことの意義は大きい。

以上のような背景から、今後看護職を目指す人材の確保、中でも男性志望者の増加は非常に重要である。そこで本研究では、看護職の人材確保の視点から、高校生の進路に関する研究を包括的に整理し、今後の課題や研究の方向性についての示唆を得ることを目的とした。

Ⅱ．研究方法

１．検索方法および対象文献

2020年３月までに発表された国内の文献を対象とした。データベースは CiNii Articles、医学中央雑誌 Web 版 Ver.5とし、検索には①「高校生、看護、職業」および②「高校生、看護、進路」の用語を用いた。①では CiNii ９件、医中誌で36件、②では CiNii 20件、医中誌で33件がヒットした。このうち、名称が「看護師」に統一された2002年３月以降の原著論文ではない文献（総説、解説／特集および会議録）を除く計４件を分析対象とした。

２．分析方法

概要（著者、発行年、題名、目的、方法、対象）と目的に添った結果、結論（まとめ）をトピックスとしてマトリックス表を作成し、分析を行った。

３．用語の定義

本研究における看護職とは保健師、助産師、看護師、准看護師のことを指し、保健・医療・福祉の幅広い分野で人々に寄り添い、健康を守る仕事に従事している者と定義した（日本看護協会，2020b）。また進路とは、将来の職業（大辞泉，2012）と定義した。

Ⅲ．結果

１．研究の動向

分析対象とした文献を年代順に示した（表１～２）。看護に関する高校生の進路および職業選択に関する研究は、それぞれのデータベースで50件前後であった。また、今回分析対象とした４件のうち３件が高校生を対象としており、残り１件は看護系進路指導担当教員を対象としていた。研究方法はいずれも自記式質問紙調査であった。

２．対象文献の研究目的と方法

対象文献の各目的は、進路指導担当教員が必要としている看護養成学校に関する情報について明らかにしようとした研究が１件、高校生の看護職のイメージや看護業務の理解度を明らかにしようとした研究１件、高校生の職業選択に対する意識と出張講座後の職業意識の変化を明らかにしようとした研究１件、医学部保健学科の４年制大学に対し、高校生が何を求めているかについて明らかにしようとした研究が１件であった。いずれの研究も、自記式質問紙調査による方法を用いていた。

３．高校生の進路に関する知見

医療人育成課程としての医学部保健学科に進学を希望する者の９割以上が女性であることから、就職に有利な資格を取得できる学部に対する女子高生の期待は高い。そのため、将来医療専門職あるいは研究職、教育職としてやっていこうとする者に対して動機づけとなるような正しい知識や情報を提供する

表１　対象文献の概要

文献番号	著者（発行年）	題名	目的	方法	対象
1	中野 他（2016）	看護系進路選択に必要な情報に関する研究（第１報）―進路指導担当高校教諭への調査から―	高等学校の進路指導に携わっている教諭が必要とする情報を明らかにする	自記式質問紙調査	大阪府下の高等学校262校（商業科、工業科含む）の看護系進路指導を主に担当している教員116名（男性76名、女性34名）
2	佐藤（2007）	高校生が感じる看護職のイメージと理解度	看護職のイメージ、看護業務の理解度、進路希望等を明らかにし、看護への関心を高め看護師等学校養成所への進学希望者を増やす対策を検討する資料とする	自記式質問紙調査	N 県内の全107校に在学する２年生1759人（男子886人、女子859人）
3	岡本 他（2007）	高校生の職業選択の意識―医療福祉系の職業を志望する学生を対象として―	高校生の職業選択に対する意識と高校出張講座受講後の職業意識の変化を明らかにし、医療福祉系を目指す高校生に必要な情報提供について検討する	自記式質問紙調査	進路指導目的の高校出張講座で、医療福祉系の講座に参加した高校生88人（回収率78.6％）
4	平野 他（2003）	医療系大学及び大学院に対する高校生の意識に関する研究	これから４年制大学を設立し大学院設置を準備中である大学に対し、高校生が何を求めているのかを明らかにする	自記式質問紙調査	九州大学医学部保健学科の説明会に出席した357名（回収率94.9％）※対象人数の記載がないため回収率から算出

表２　対象文献の調査結果および結論（まとめ）

文献番号	結果	結論（まとめ）
1	80％以上の教員が看護系進路指導に困難を有していた。全体で多かったのは、養成課程の違いがわかりにくい（61.9％）であった。 進路指導時に実施した取り組みで役立った内容として、オープンキャンパスへの参加（87.8％）、看護体験の機会設定（85.1％）をあげていた。	看護系進路指導教員は、看護師養成課程が複数あり、違いがわかにくく、情報がないことに困難を感じていた。 進路指導の取り組みとしては、オープンキャンパスや看護体験への参加を促し、学生がイメージ先行で進路選択をしないよう考慮しているとしていた。
2	看護の仕事に就きたいと思っている高校生は115人（6.5％）であり、男子の4.0％、女子の9.3％が看護職を志望していた。 看護職のイメージで、高校生の多くが「そう思う」と回答した項目は「人の生命に関わる仕事である」(86.8％)、「人の役に立つ仕事である」(80.1％)、「たくさんの知識や技術が必要な仕事である」(75.2％)、「責任感がとても必要である」(73.6％）だった。 看護職を志望しない高校生の50～60％が「今後さらに社会的な必要性が高まる仕事である」と「一生役に立つ技術を身につけられる仕事である」の２項目について「そう思う」と回答していた。 看護職を志望している115人のうち38人（33％）の高校生が志望したきっかけとして「身近にいる看護職からの話」をあげていた。 希望する職種は、看護師（59.1％）、保健師（13.9％）、助産師（6.1％）、未定（17.4％）の順に多かった。	社会的ニーズや国家資格を持つ意義、看護の魅力については、もっと周知される必要がある。 １日看護師体験や看護系学校の教員による出前授業を経験した高校生は、さらなる興味ややりがいを感じている。看護に関心を持ってもらうためには、看護の醍醐味を知る機会が求められる。 保健師や助産師については志望している高校生が少なく、イメージしにくいと考えられる。看護職の職種や活躍の場、将来のキャリアアップについてもアピールしていく必要がある。
3	看護師になりたい者は57名（66.3％）、保健師27名（31.4％）、助産師23名（26.7％）、養護教諭30名（34.9％）であった。自由記述から「理学療法士」「介護」「薬剤師」に関心があることを示す記述もあった。 「混乱」の因子である「やりたい職業についていろいろ考えるが、一貫性がない」、「職業の選択を間違ってしまうのではないかと不安で、１つの方向に決められない」、「職業に就くことができても、うまくやっていく自信がない」において「当てはまる」と回答した学生が多かった。 「模索」の因子である「今はいろいろなことを経験してみる時期で、職業を決めるのはまだ先だと思う」で「当てはまらない」と回答し、「まだ情報不足なので、職業に関する情報をもっと集めてから決めたい」で「当てはまる」と回答した学生が多かった。	高校１年生および２年生の早期から職業選択の必要性を意識し、積極的に情報収集していたが、職業決定に対して不安になり情緒的に混乱している様子が明らかとなった。 情報提供は看護師に狭めることなく医療福祉系全般に幅広く行うことや、具体的に職業がイメージでき、職業が決定できるような工夫が必要であると考えられた。
4	２年生が80.7％を占め、女性は全体の92.5％であった。希望専攻は、看護学専攻251人（67.3％）、検査技術科学専攻80人（21.4％）、放射線技術科学専攻42人（11.3％）の順で多かった。 将来大学や大学院を終了した後に就くことを希望している職種（複数回答）としては、「医療専門職」324人（91.3％）、「研究職」43人（12.1％）、「教育職」42人（11.8％）で、圧倒的に「医療専門職」を希望している者が多かった。希望専攻毎に比較したところ、学年別には有意な差はなかったが、女性は看護学専攻及び検査技術科学専攻に多く、男性は放射線技術科学専攻に多い傾向が明らかになった。 「大学への関心」についてもっと知りたい項目は、「大学を卒業後就くことのできる職種の仕事の内容」(93.3％)、「大学で履修する実習科目の内容」(94.7％)、「大学を卒業後取得することのできる資格について」(93.3％)、「大学で履修する専門科目について」(91.7％）であった。	医療人育成課程としての医学部保健学科に進学を希望する者の９割以上が女性であることからも、就職に有利な資格を取得できる学部に対する女子高生の期待は高い。 将来医療専門職あるいは研究職、教育職としてやっていこうとする者に対して動機づけとなるような正しい知識や情報を提供することは必要不可欠である。

ことは必要不可欠との見解が示されていた。

高校生は１年生および２年生の早期から職業選択の必要性を意識し、積極的に情報収集しているが、職業決定に対して不安になるなど、情緒的に混乱していた。そのため情報提供は看護師に狭めることなく医療福祉系全般に幅広く行い、職業が具体的にイメージできるような工夫が必要であるとの考えを示していた。

社会的ニーズや国家資格を持つ意義、看護の魅力について、より周知される必要性について述べられていた。また、１日看護師体験や看護系学校の教員による出前授業を経験した高校生は、さらなる興味ややりがいを感じていた。よって看護に関心を持ってもらうためにも、看護の醍醐味を知る機会が求められるとの考えを示していた。さらに保健師や助産師については志望している高校生が少なく、イメージしにくいと考えられるため、看護職の職種や活躍の場、将来のキャリアアップについてもアピールしていく必要があるとの見解を示していた。高校生の看護系進路指導に関わる教員は、看護師養成課程が複数あり、違いがわかりにくく、情報がないことに困難を感じていた。オープンキャンパスや看護体験への参加を促す取り組みを行うことで、学生がイメージ先行で進路選択をしないよう考慮していると述べられていた。

Ⅳ．考察

１．看護職を志望する高校生の現状

今回分析対象とした研究の中で高校生を対象とした３件の研究は、看護職の人材確保の観点からどのような知識や情報提供を行えばよいかについて述べていた。その根拠としているのが、高校生の看護および看護職に対する認識であった。佐藤（2007）は、高校生は看護職に対しポジティブなイメージを抱いているとしつつも、「今後さらに社会的な評価が高まる仕事である」、「一生訳に立つ技術を身につけられる仕事である」の２項目で「そう思う」との回答が50～60％であることに着目し、社会的ニーズや国家資格を持つ意義、看護の魅力については、もっと周知される必要があると述べていた。また岡本，渋谷（2007）は、高校生の職業選択に対する意識として「混乱」と「模索」の因子を明らかにした。高校生が１つの職業を選択することの困難さから、医療職に関する幅広い知識や情報を提供するとともに、その職業が具体的にイメージできるような工夫も必要であるとの考えを示していた。

平野（小原）ら（2003）は、医学部保健学科の進学を希望する高校生の９割以上が女子であり、そのうちの７割近くが看護学専攻を希望していることに触れ、最も知りたがっていることが「仕事の内容」であることを明らかにした。女性の就職に有利な資格を取得できる学部の期待は高いと述べたうえで、その動機づけとなるような正しい知識や情報を提供することが必要不可欠との見解を示した。

これらの内容はいずれも質問紙調査により明らかにした看護職に対する高校生の認識をもとに検討された知見である。今後の職業説明会や高校への出張講座等、看護職における人材を確保するための啓発活動に取り組むうえでは、十分考慮すべき内容であると考える。

高校生の進路に深く関係すると思われる看護系進路指導教員を対象とした研究も１件見られた。中野，永井，山川（2016）は、看護系進路指導教員が看護師養成課程について理解しにくく、情報もないという困難さを感じていることを明らかにした。それはそのまま高校生にも当てはまることが十分推測できることから、高校生および高校教諭に対しての情報提供や、情報を得ることのできる環境を整えることも重要となるだろう。

２．今後の研究課題と方向性

看護職を志望する高校生を対象とした原著論文は非常に少なく、検索した文献の多くが解説／特集および会議録であったことから、十分な知見が明らかにされているとは言い難い。「高校生が感じる看護職のイメージと理解度」（佐藤，2007）からすでに13年が経過しており、現在の高校生の実態が様変わりしていることも十分考えられる。また、これらの研究は一部の地域のみの高校および高校生を対象としており、結果の一般化も困難であることが推測される。

以上のことから今後は、一般化できるだけのサンプリングを行ったうえで看護職に対する高校生の認識を明らかにするような研究が求められる。また、新たな研究の方向性として男子高校生に着目することも重要と考えられる。看護婦、看護士との名称が看護師へと統一されてから18年が経過し、看護職の存在は男女ともに広く社会に知られるようになった。菱沼（2016）は、病院での男性看護師の需要は高く

積極的に雇用する施設が増えているとしたうえで、男性だからこそわかり得る男性患者への関わり方や、看護の新たな役割や発展が期待されると述べている(p. 10)。就業看護師の９割が女性を占めていることや、看護職を志望する高校生のほとんどが女子であった研究結果からも、男子高校生の看護職に対する認識について明らかにする研究の意義は大きいと思われる。

３．本研究の限界と今後の課題

本レビューは、看護職を含む文献を対象とし、高校生の進路および職業選択といったキーワードのみの文献は含めていない。したがって、高校生が進路や職業選択においてどのような知見が蓄積されているかまでは触れられていない。高校生が将来就きたい職業の中に看護職を含めてもらうためには、今後は数ある選択肢の中の「いち職業」としての視点から文献レビューを行い、看護職の人材確保のための課題や方策について明らかにしていく必要がある。

Ⅴ．結論

看護職の人材確保の視点から、高校生の進路に関する文献を整理した結果、以下のことが明らかとなった。

１．看護職および看護師養成課程、職種（保健師、助産師）や活躍の場、将来のキャリアアップについて具体的にイメージできるだけの知識や情報を提供する必要性が示唆されていた。

２．社会的ニーズや国家資格をもつ意義、看護の魅力については、より広く周知される必要性が示唆されていた。

３．看護職における高校生の進路および職業選択に関する研究は非常に少なく、その対象も一部の高校生や看護職を志望する女子に限られていた。今後は全高校生を対象とした調査を行い、看護職を志望する背景にはどのような要因があるか、志望者の数が圧倒的に少ない男子は看護職をどのように認識しているかといった実態を明らかにしていく必要性が示唆された。

Ⅵ．引用文献

菱沼典子（2016）．これから目指す人・働く人のための看護の仕事がわかる本．日本事業出版．

平野（小原）裕子，東田善治，梅村創，豊福不可依，小島夫美子，田宮貞史，長家智子，赤坂勉（2003）．医療系大学及び大学院に対する高校生の意識に関する研究．九州大学医学部保健学科紀要，1, 59-70.

厚生労働省（2019a）．医療従事者の需給に関する検討会，看護職員需給分科会，中間とりまとめ（概要）．https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000567573.pdf［2020/9/25閲覧］

厚生労働省（2019b）．男性の育児休業取得促進研修資料，中小企業における取組促進のために．https://ikumen-project.mhlw.go.jp/company/training/download/promotion_smes201902.pdf［2020/9/25閲覧］

厚生労働省（2019c）．看護師等学校養成所入学状況及び卒業生就業状況調査．https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&toukei=00450141&tstat=000001022606［2020/9/25閲覧］

厚生労働省（2018）．平成30年衛生行政報告例（就業医療関係者）の概況，就業保健師・助産師・看護師・准看護師．https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/eisei/18/dl/kekka1.pdf［2020/9/25閲覧］

厚生労働省（2010）．平成22年度衛生行政報告例（就業医療関係者）結果の概況，就業保健師・助産師・看護師・准看護師．https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/eisei/10/dl/h22_hojyokan.pdf［2020/9/25閲覧］

中野妙子，永井由美子，山川正信（2016）．看護系進路選択に必要な情報に関する研究（第１報）―進路指導担当高校教諭への調査から―．大阪教育大学紀要，第Ⅲ部門，64（2), 63-71.

日本看護協会（2020a）．査研究報告，2019年，病院看護実態調査．https://www.nurse.or.jp/home/publication/pdf/research/95.pdf［2020/9/25閲覧］

日本看護協会（2020b）．看護職とは．https://www.nurse.or.jp/aim/nursing.html［2020/9/25閲覧］

岡本佐智子，渋谷えり子（2007）．高校生の職業選択の意識，医療福祉系の職業を志望する学生を対象として．日本看護学会論文集，看護教育，38, 201-203.

佐藤信枝（2007）．高校生が感じる看護職のイメージと理解度．ヘルスサイエンス研究，3（1), 91-98.

武村雪絵，佐々木美奈子，米倉佑貴他，國江慶子，市川奈央子，木田亮平（2018）．看護職員確保対策に向けた看護職及び医療機関等の実態調査．厚生労働省データベース．